斑尾ジャズ２０１１報告書

創設以来５年目を迎えた「斑尾ジャズ２０１１」は８月２０日（土）・２１日（日）の両日、斑尾高原スキー場特設ステージで行われた。

年々賑やかになり、今年は早くも４月に参加募集定数に達し、締め切られた。参加グループは２０、参加演奏家は２３０名を超え、観客は２日間で１，３００名に上り、これまでで最大規模の祭典となった。ビッグバンド６、コンボ１１、ゴスペルコーラス、２０数名の演奏家が次々に出演するグループ、地元の和太鼓グループ等多彩な組み合わせとなった。地元新潟・長野県からも６グループが参加した。

今年は、地震・津波の被災者支援と長いトンネルに留まる日本を元気付け、勇気と希望を鼓舞する祭典とし、社会的な側面を打ち出した。２日間のプログラムの中に勇気と希望をメッセージとして伝える楽曲を配し、支援曲として「Hope」「Good News」「希望という名の光」「東北讃歌ジャンガラ」「りんご追分」「聖者の行進」「上を向いて歩こう」「ふるさと」などが演奏された。「長野インターネット放送局」からは、出場バンドの演奏や会場の様子を動画で配信した。祭典終了後もこのサイトを訪れる人は絶えず、今も全世界に向け発信を続けている。毎年会場に設置している壷シリーズは、今年は「希望の壷」とし、被災者支援の寄付をお願いした。募金は２７，０００円に達し、売上げから補充して４０，０００円を寄付した。

毎年最も盛り上がる「斑尾ジャズ交流パーテイー」は２４０名の参加を得て斑尾山の家で行われた。７バンドの演奏、福井ともみバンドとのセッション、斑尾ジャズ記念オーケストラの演奏と、盛り沢山であった。地元の食材を使ったペンションの奥さん達の多彩な料理は会場を盛り上げた。ゲストとして参加いただいたジャズ評論家・瀬川昌久氏に講評もいただき、Big Band Bazooka が瀬川賞を受賞した。斑尾ジャズ記念賞が豊田故郷太鼓に、斑尾ジャズアンコール賞が都庁スイングビーツに授与された。

主会場では、ブースに地元の方々の出店を呼びかけ、農産物・果物・生搾りジュース販売、フリーマーケットなどバラエティーに富んだ屋台村となり、地元在住の外国人による、ネパールのサモサ、カンボジアカレーのブースは人気を博した。そのほか、地元「妙高フォトコミッション」の協力で「斑尾ジャズフォトコンテスト」も行なわれた。

観客の入場料を無料とし、参加演奏家の参加費をベースに収入の範囲内に支出を抑え、特に人件費は地元の人々やジャズの愛好家のボランティアで賄う運営モデル「斑尾方式」は、５年のイベント運営を経て確立の基盤が出来つつある。コストを出来るだけ切り詰め、自力で行うこの市民ジャズの祭典は今後も更に進化し続けるであろう。「斑尾方式」は昨年から「信越五高原ロングライド」にも応用され、信越高原の新たな観光資源の創出と自転車普及に貢献し始めている。

最後にこのジャズの祭典を支えていただいた全国のジャズファン、協賛・協力・後援の各団体、地元自治体、新聞・雑誌他メデイアの方々、そしてボランティアの皆様に、心からお礼を申し上げたい。

ふるさとのジャズ交流祭実行委員会　実行委員長　新山敏　　2011/09/10